

Music, my friend



社会医療法人友愛会 友愛医療センター 総合内科 池原 泰彦

12歳の娘は欧米のポップ音楽に夢中で、寝ている時以外はずっと歌を口ずさんでいると言っても過言ではない。稽古事への送り迎えの車内では、米軍ラジオ放送のトップ100番組を聴きながら、自分の好きな歌手の順位の変動に一喜一憂している。ずっと一緒に聴かされていると、最新の音楽への興味の有無に関わらず、私までもがアメリカの流行音楽に多少なりとも詳しくなってしまった。

私も音楽が趣味であり、自宅には5,000枚のレコードとDJブースがある。いかなる収集趣味も家族には迷惑、と聞いたことがあるが、我が家にもその風潮が多少はあり、逆風の中レコードに針を落とすことを楽しんでいる。ジャンルもソウル、R&B、ヒップホップ、ロック、ニューウェーブ、スカ、ユーロビート、ハウスからジャパニーズポップスまで多くをカバーしており、以前は友人からの依頼があればDJをすることもあった。DJはライブパフォーマンスであり、自分の選曲でフロアーで踊る人々が盛り上がるのは快感以外のなにものでもない。ライフスタイルも変わり、いまでは新しくレコードを買うことも少なくなったが、思い出す様々な方法でレアなレコードを手に入れてきた。インターネットのオークションで競り落としたり、新幹線に乗って地方都市のレコード屋にわざわざ出向き、買い物に行くこともあった。休日、レコード屋めぐりをするのは東京在住時、何よりの楽しみであった。

年齢のせい、最近は特に80年代の音楽をレコードで楽しむことが多くなった。懐かしい音楽を聴くとなんとも心地が良く、その時代の一瞬でトリップできてしまう。30年前の音楽を聴く私を娘は「古臭い」と苦笑する。しかし、娘が「最新」と呼ぶリズムやビートは、70年代～90年代のどこかですでに使われた音に似ているものがとても多く、私の耳にはまるで「リサイクル」に聞こえてしまう。めぐりめぐってきた音はこれからも周って行くのであろうが、私は音楽とはいつも「友達」でいたいと思う。コロナがいつか収束した日に、またフロアーを眺めながらどこかでレコードを回すことを夢見ている。

